

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナーⅠ | 000 | 穂山洋子 |

■授業概要

【歴史学】

グローバル地域文化教養セミナーは、さまざまな学問分野・領域（以下、ディシプリン）の枠に従って開講される少人数のセミナーである。グローバル地域文化学部では必要に応じて領域横断的・超領域的（インターディシプリナリー）なアプローチを学ぶが、それを有効に遂行するためには、その前に各ディシプリンに固有の考え方やアプローチ、視角、学問的な手続きを学ぶ必要がある。

本セミナーでは歴史学について学ぶ。まず、歴史学の発展史を概観した後、歴史学の古典的入門書である E.H.カー『歴史とは何か』を講読し、歴史学の基礎および方法論を学ぶ。その際、文献の読解力と要約力の向上にも力を入れる。次に、武井彩佳『歴史修正主義』を講読し、事実とは何か、歴史を新たな視点で見直すことと歴史修正主義との違いは何かについて考える。最後に、スイスの高校で使用されている教科書（歴史副読本）を使用し、「スイスの『過去の克服』」と「第二次世界大戦とスイス」をテーマとして歴史学的な考察を実践する。

キーワード：歴史学の方法論，歴史叙述，歴史とは何か，歴史的事実と真実

■成績評価

積極的な授業参加，文献要約発表，グループ発表，中間レポート，期末レポートから総合的な評価をする。

■テキスト

E・H・カー『歴史とは何か』清水幾太郎訳，岩波新書，1962年

武井彩佳『歴史修正主義』中公新書，2021年

■受講上の注意

本セミナーでは、グループ作業を基本とし、文献内容発表，グループ発表，グループディスカッション，全体ディスカッションが含まれるため，積極的な授業参加が求められる。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|-------------------|-----|-----|
| グローバル地域文化教養セミナー 2 | 000 | 殷 晴 |

■授業概要

本セミナーでは、歴史学の基本的な作法と思考法を学び、卒業論文作成に向けた準備作業を進めるとともに、歴史研究の楽しさを味わってもらいたい。

まず、榎本泰子著『上海オーケストラ物語』を手がかりに、歴史研究の基礎である「史料」とは何か、史料をどのように利用するかを実感する。

次に、東京大学教養学部歴史学部会編『歴史学の思考法』および松沢裕作著『歴史学はこう考える』の一部を講読し、史料の種類や史料への向き合い方を概観する。

その後、小田中直樹著『歴史学のトリセツ』を読みながら、どのような歴史研究が面白いかについて議論を深める。

最後に、自らの問題関心にに基づき史料の収集と分析を実践する。

■成績評価

積極的な授業参加、プレゼンテーション、期末レポートから総合的な評価をする。

■テキスト

榎本泰子『上海オーケストラ物語：西洋人音楽家たちの夢』春秋社、2006。

東京大学教養学部歴史学部会編『歴史学の思考法』岩波書店、2021。

松沢裕作『歴史学はこう考える』筑摩書房、2024。

小田中直樹『歴史学のトリセツ』筑摩書房、2022。

■受講上の注意

背景知識は特に求めない。ただし、歴史学に好奇心を持つことが必要である。毎回読むテキストの量は決して多くはないが、精読した上でじっくり考えること、そして毎回当事者意識を持って他の受講生と積極的に議論を行うことが求められる。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|------------------|-----|-----|
| グローバル地域文化教養セミナー3 | 000 | 渡辺文 |

■授業概要

【人類学】

<概要>

グローバル地域文化教養セミナーは、さまざまな学問分野・領域（以下、ディシプリン）の枠に従って開講される少人数のセミナーである。グローバル地域文化学部では必要に応じて領域横断的・超領域的（インターディシプリナリー）なアプローチを学ぶが、それを有効に遂行するためには、その前に各ディシプリンに固有の考え方やアプローチ、視角、学問的な手続きを学ぶ必要がある。

人類学、なかでも文化人類学は、他者理解や異文化理解をめざす学問だとよく言われるが、「理解」という行為はこの学問分野独特の思考法や調査手法に支えられている。本セミナーではテキストの講読を通じて複数のテーマを取りあげながら、文化人類学的に思考する方法を学び、「理解」の内実について考えていく。テキストの他にも、英語文献を含む関連資料を適宜配布のうえ講読する。テーマは自然、環境、技術、呪術、宗教、芸術、経済、政治、国家、戦争、親族、ケア、市民社会等、多岐にわたる。そして、これらを踏まえながら、自分が前提とする「あたりまえ」を問い直し、他者との具体的な関係性のなかで文化相対主義的な見方を構築していくことの意義や困難について考えていく。発表やグループディスカッションを軸とした授業を行うので、積極的な姿勢や、クラスメイトと協働する意志をもって授業に臨んでください。

<到達目標>

- ・文化人類学的な思考法で様々な事例を考察できるようになる。
- ・人類文化の多様性に関心を向けるとともに、人類に共通する普遍性についても意識できるようになる。
- ・自分の意見を積極的かつ論理的に発信するとともに、他者との協働を通じて意見を磨いていけるようになる。

■成績評価

平常点（出席、テキスト内容の発表、議論への積極的かつ協働的な参加） 50%

期末レポート（問いの面白さと適切さ、思考の論理性、表現力等を総合的に評価する） 50%

■テキスト

松村圭一郎・中川理・石井美保（編）『文化人類学の思考法』世界思想社、2019

■受講上の注意

積極的かつ協働的な授業参加が求められるので、発表回だけでなく、毎回しっかりとした準備が必要になる。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナー4 | 000 | 伊藤玄吾 |

■授業概要

本セミナーでは、「文学」というディシプリンにおいて蓄積されてきた様々なアプローチや視角、独特の学問的手法を学びながら、その有効性や可能性（もしくは限界）を理解していきます。自らの経験、そして他者の経験が、物語や比喩、虚構といった文学に特徴的な手法を通していかに表象されるのか、また、個人や共同体のアイデンティティ形成のプロセスにおいて、そうした文学的な要素がいかに重要な機能を果たしているかを、具体的な作品分析を行いながら考察していきます。

導入として、対象を文学の視点から分析し考察するとはどういうことなのか、そしてそれが「グローバル」と「地域」と「文化」に関わるこの学部の学びといかなる点で深く繋がっているのかについて考えます。続いて、文学研究の様々な方法論の中から、主として物語論、比喩論、フィクション（虚構）論という3つのアプローチについて学びます。後半では、具体的な作品（古典および現代の作品の中から特に社会的な問題を深く扱っているものを中心に）を取り上げ、分析の実践を行います。こうして文学テキストの細部を丁寧に読み込み、そこに刻み込まれた様々な問題を浮かび上がらせる練習を積むことによって、皆さんが今後のGR学部の学びにおいても、文学研究の視点を生かしたアプローチができるようになることを目指します。

■成績評価

毎回の課題提出、授業での発表、期末レポートによる総合的な評価とします。

■テキスト

プリント教材

■受講上の注意

それぞれの受講者が、自身の文献読解・分析の精度を高め、内容に関する考察を深めていくプロセスを重視します。そのために、毎回の課題にしっかりと取り組むことはもちろん、他の受講生と積極的に議論を行ってほしいと思います。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナー5 | 000 | 崎田智子 |

■授業概要

【言語学】

本セミナーでは、人間と言語の本質を探求するために、実際の生きた文脈の中でダイナミックに用いられる生きた言葉の面白さや、言葉の背後にある側面を科学的かつ体系的に探求する認知語用論のアプローチを学ぶ。音声、語彙、文法、意味を単に暗記しても自然な言語運用にはほど遠い。そこで、談話とは何か、イントネーション単位、意識の活性化、情報の制約、注意のシステム、対話の展開、対話のルール、など、実際の言語運用を基礎付ける要素を学ぶ。さらに、空間認知、五感、運動感覚、イメージ形成、視点の投影、視点の転換、カテゴリー化、参照点能力、など、言語現象の発現の基盤となる要因を考察する。

伝統的言語学では自律的記号システムとして言語を音声、語彙、文法、意味などの各レベルで客観的に分析してきた。しかし、現代の言語学では、言語を心、身体、運用と切り離すのではなく、伝達とコミュニケーションの観点から発話者や文脈を視野に入れて言語運用の側面に焦点を当てる語用論の重要性が増し、さらには認知科学を基盤にして、主体の一般的認知能力と認知プロセスを基盤にした言語現象の分析が精力的に行われている。響鳴やスタンスなど最先端の理論にも触れ、テレビトーク、漫才、家族間会話他、多くの日英データを参照しながら、対話の流れや発話構築のメカニズムを見ていく。

毎回の講義に加え、関連事項の発表、質疑応答、討論。フィールドワークの手法を学び、日常対話の収集や分析を試み、レポートにまとめる。発表や討論への参加も総合的に評価する。

■成績評価

平常点(出席、クラス参加、グループ作業の成果等)

期末レポート試験・プレゼンテーション

提出物(小レポート等)

■テキスト

崎田智子・岡本雅史 「言語運用のダイナミズム：認知語用論のアプローチ」 研究社

■受講上の注意

小レポートの提出がない場合は出席点は付与しない。

授業の3分の2以上に出席しない場合は成績評価を行わない。

授業中の発言に点数が付与される。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナー6 | 000 | 神崎 舞 |

■授業概要

【舞台芸術論】

舞台芸術というと、具体的なイメージが湧きにくいかも知れない。しかし、劇団四季や宝塚歌劇団、さらにカナダのシルク・ドゥ・ソレイユといえば、知っている人も多いのではないだろうか。舞台芸術は、意外にも我々の身近に溢れている。

本授業では、舞台芸術（演劇、ミュージカル、ダンスなど）に関するテキスト及び関連資料の輪読に加え、映像資料の鑑賞を通して、舞台芸術に対する理解を深めていく。また、舞台芸術はその作品が生まれた地域の社会や文化と少なからず結びついている。そこで、作品を取り巻く社会的・文化的背景に関する知識の習得も目指す。授業では、抽象論に陥ることなく、具体的な作品を取り上げながら、さまざまなジャンルとの関連性や文化的背景を考察する。

本授業の前半では、舞台芸術に関するテキストを輪読し、グループ・プレゼンテーションを行った上で、多角的な視野を得るために、全員でディスカッションを行う。ディスカッションの際には、積極的に発言することを心掛けてほしい。また授業の後半では、各自が関心を持っている作品を分析し、個別プレゼンテーション及びディスカッションを通して考察を深める。学期末には、その内容をもとにレポートを作成することが必須となる。

■成績評価

授業参加度、グループ・プレゼンテーション、個別プレゼンテーション、及びレポートの成果を総合的に評価する。

■テキスト

Fischer-Lichte, Erika, *The Routledge Introduction to Theatre and Performance Studies*. London: Routledge, 2014.

■受講上の注意

毎回の積極的な授業参加が求められる。また、授業に関する連絡、資料配付、レポート提出等は e-class を利用して行う予定である。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナーⅦ | 000 | 遠藤 徹 |

■授業概要

思想というものは、思想そのものとして原著を読んで学ぶというのが王道かもしれない。けれども、むしろ思想というものがいかに「実践」されるのか、思想はどのような形で「表現」されるのかということ、具体的に学ぶ方が、体感として受け止めやすいようにも思う。そこで、この授業ではマルクスの思想の研究者の目から見た20世紀の歴史を通して、思想というものの射程の深さを体感してもらいたいと思う。肯定するにせよ、否定するにせよ、ひとつの思想というレンズを通して見ることで、歴史が単なる出来事の連なりではなく、有機的につながった「意味」のあるものとして姿を現してくるのがわかるだろう。授業では各章の要約を分担制で発表してもらった後、そのような歴史の切り取り方や解釈について活発な議論を期待する。

■成績評価

授業での分担発表と各回のまとめレポート(授業の終わりに提出)と、課題に基づく最終レポートで評価する。ゼミ形式なので出席ももちろん重視する。

■テキスト

的場昭弘『資本主義がわかる「20世紀」世界史講義』(日本実業出版社、2023)

■受講上の注意

出席を重視する。各回の発表と、まとめレポートが評価の半分を占めるので、予習をしっかりと活発な議論ができるよう準備しておくことが望まれる。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|-------------------|-----|-------|
| グローバル地域文化教養セミナー 8 | 000 | 石井 香江 |

■授業概要

本教養セミナーでは、従来の社会学の基礎となる考え方や理論・方法だけでなく、グローバリゼーションの展開を踏まえた社会学の新しい潮流（「グローバル・ソシオロジー」）が扱うテーマや理論・方法の応用法についても学びたい。具体的には、以下の5つの観点に注目しつつ、重要なトピックも取り上げたい。その際、映画などの映像資料も参照しながら、グローバル・ソシオロジーに関する基礎的かつ概括的な文献の理解を深め、グループワークで議論する訓練をする。

- ・ グローバル・ソシオロジーとは何か？
- ・ 多様化する国民・移民・難民
- ・ グローカル化がすすむ日常生活
- ・ 国境を超えるつながりと新しい境界
- ・ グローバル化と社会問題

本セミナーで学んだ知識や社会学の考え方を補助線にして、グローバル社会の諸問題について分析的に考える素地を作ること为目标としている。

■成績評価

| | | |
|--------|-----|--|
| 平常点 | 10% | 出席 |
| 中間レポート | 20% | 課題の意味を理解し、教科書で学んだことを参考にしながら、自分の意見が展開されているかどうか。 |
| 提出物 | 30% | 毎回提出する課題シートに適切な内容が書かれているかどうか。 |
| 期末レポート | 40% | 課題の意味を理解し、講義全般の内容を踏まえていることに加え、独自の意見が展開されているかどうか。 |

■テキスト

以下の教科書（初回到配布）に加え、内容を補足する資料などを配布する予定である。

石井香世子編『国際社会学入門』（ナカニシヤ出版、2017年）

■受講上の注意

課題は毎回出され、報告回数が多いので、負担が重いこと、出席は必須であることを十分に理解した上で、受講するかどうかを決めてください。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナーⅨ | 000 | 倉科一希 |

■授業概要

グローバル地域文化教養セミナーは、さまざまな学問分野・領域（以下、ディシプリン）の枠に従って開講される少人数のセミナーである。グローバル地域文化学部では必要に応じて領域横断的・超領域的（インターディシプリナリー）なアプローチを学ぶが、それを有効に遂行するためには、その前に各ディシプリンに固有の考え方やアプローチ、視角、学問的な手続きを学ぶ必要がある。

本セミナーでは、近年の各国政治を説明する際に用いられる「ポピュリズム」という言葉の検討を通じて、近年の政治の変容を理解するとともに、政治学の基本的な考え方を学ぶ。具体的には水島治郎およびヤン＝ヴェルナー・ミュラーがそれぞれに執筆した『ポピュリズムとは何か』をテキストとして、複数の解釈のあるポピュリズムを学ぶ。

■成績評価

積極的な授業参加、文献要約の発表、グループ発表、期末レポートから総合的に評価する。

■テキスト

水島治郎『ポピュリズムとは何か——民主主義の敵か、改革の希望か』（中公新書、2016）
ヤン＝ヴェルナー・ミュラー『ポピュリストとは何か』（岩波書店、2017）

■受講上の注意

本セミナーでは、文献内容の発表やグループディスカッション、全体ディスカッションが含まれるため、積極的な授業参加が求められる。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|-------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナーⅠ0 | 000 | 浅羽祐樹 |

■授業概要

物事がいま、どのようにあるのか (what it is)。なぜ、そのようになった (why it is as it is)。どのようにあるべきなのか (what it should be)。どのように変えることができるのか (how it can be changed/how to change it)。トピックが何であれ、いずれ卒業論文では、これら4つの問いに各自が取り組むことになることを見据えて、このセミナーでは、国際関係論の視角から、「科学的にアプローチする」ための技法や姿勢をトレーニングする。

具体的には、当代随一の研究者（多湖淳・早稲田大学政治経済学術院教授、第16回日本学術振興会賞受賞）が一般読者向けに分かりやすく書いた「手応えのある」新書（序章と1～6章の事実上7章構成）を基に、2回で1章ずつのペースで輪読・発表・議論する。そうすることで、スタンダードな国際関係論の知見を得ると同時に、最先端の科学的方法論（ゲーム理論やサーベイ実験など）についても概要をつかむことができるようになる。

「巨人の肩の上に立つ」と、見晴らしや見通しが圧倒的に良くなるという経験を一度しておく、国際関係論に限らず、他の分野でも将来、それぞれの「巨人」を自ずと探し始めるようになるはずである。決して「楽」ではないが、「楽しかった」「為になった」「成長できた」と2025年7月末に振り返ることになることを約束する。

■成績評価

- ・文書によるコミュニケーション能力（要約の作成、課題） 30%
- ・口頭によるコミュニケーション能力、議論に貢献しようとする姿勢 30%
- ・学期末レポート（2000字） 40%

■テキスト

多湖淳『戦争とは何か－国際政治学の挑戦』（中公新書、2020年）

<http://www.chuko.co.jp/shinsho/2020/01/102574.html>

■受講上の注意

各週の内容は以下の通り。【W1】「科学的なアプローチ」とは何であって、何でないのか；【W2】序章「戦争と平和をどのように論じるべきか」の要約・議論；【W3】序章に関する課題；【W4】第1章「科学的説明の作法」の要約・議論；【W5】第1章に関する課題；【W6】第2章「戦争の条件」の要約・議論；【W7】第2章に関する課題；【W8】第3章「平和の条件」；【W9】第3章に関する課題；【W10】第4章「内戦という難問」の要約・議論；【W11】第4章に関する課題；【W12】第5章「日本への示唆」の要約・議論；【W13】第5章に関する課題；【W14】第6章「国際政治学にできること」の要約・課題、学期末レポートの提出；【W15】学期末レポートの批評

第2・3・5・7・9・11・13週の計7回は、受講生全員が5分（受講生数次第では3分）ずつ発表する。そのつど、レジュメ（A4で1枚）を準備する。さらに、少なくとも1回は、各章の内容を要約した上で、その論点を提示し、議論を促す役割を担う。口頭及び文書によるコミュニケーション、議論、ファシリテーションなどに関するトレーニングの機会を十分提供する代わりに、自らの／互いの「成長」にコミットメントを示してもらいたい。そうした「学びの共同体（learning community）」と共に創り上げていく過程（team building）へ、ようこそ！

担当者は在外研究中ゆえ、直接相談に応じられないが、いろんなかたちでレファレンス（参考文献という意味でもあり、照会するという意味でもある）をとってみてください。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|-------------------|-----|-------|
| グローバル地域文化教養セミナーⅠⅠ | 000 | 二村 太郎 |

■授業概要

本セミナーでは「グローバル地域文化学なるもの」の一部を担う地理学について、その具体的な内容や多様な研究テーマについて理解を深めていく。具体的には、まず文化地理学を軸とした様々な系統的研究について理解する。次に、地理学で「ツール」として使う地図の読図や景観観察および簡単な地図作成を経験し、「身体と五感」を通して日常から地理学的視座について考えていく。さらに、地理学の多様なテーマについて、学術論文を検索・通読しながら知見を増やしていく。

本科目はコース横断型で開講されるものであり、グローバル地域文化学部のどのコースに所属する学生にとっても各自の学びや研究関心を深める機会となるように構成している。半期で地理学という広範な学問分野の全体を網羅することは難しいが、受講者が卒業論文作成に向けて地理学の重要性を理解しながらテーマを深化させていくための機会としてほしい。

2024年度シラバス：

<https://syllabus.doshisha.ac.jp/html/2024/2201/12201061000.html>

■成績評価

平常点（クラスでの発表や議論参加を含む）：60%、期末レポート：40%

■テキスト

- 森 正人・中川 正『文化地理学ガイダンス：あたりまえを読み解く三段活用 [改訂版]』（ナカニシヤ出版、2022）。ISBN：9784779516146 学期の前半は全員で本書を利用する。
- 野間晴雄・香川貴志・土平 博・河角龍典・小原文明 編著 『ジオ・パル NEO－地理学・地域調査便利帖－』第二版（海青社、2017）ISBN:9784860993153 本書は参考書扱いとする。地理学を広く学んでいく関心がある方は、ぜひ1冊持っておくことを勧める。
- Murphy, Alexander. *Geography: Why It Matters*. (Polity, 2018). (参考書)
- （参考：2019・2020年度使用テキスト）マッシュューズ&ハーバート著、森島・赤坂・羽田・両角共訳 『地理学のすすめ』（丸善出版、2015）

■受講上の注意

・本科目を受講する際は、春学期に並行して開講される『地理学Ⅰ』も同時に履修することを強く勧める。『地理学Ⅰ』では世界各地に関する様々なテーマを取り上げるので、併せて履修することで、地理学に関してより理解が深まる。

・学期中の週末に日程を調整して、野外巡検（大阪・神戸など）を実施する予定である。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|-------------------|-----|------|
| グローバル地域文化教養セミナーⅠⅡ | 000 | 清水 穰 |

■授業概要

GR学部の中にはアートに関心を持っていて、卒論のテーマに様々な芸術分野を選択する学生が少なくない。このセミナーでは、現代のアート（美術、写真、音楽、舞踏、陶芸…）にアプローチし、分析し、発表する学問的方法を訓練する。「現代」の芸術にアプローチする際に、どうしても基本となるものが20世紀初頭にヨーロッパで発生し、地球上に拡散していったモダニズムという運動である。そこで基本テキストとして定番の教科書、

『Art Since 1900: Volume 1: 1900 to 1944』『Art Since 1900: Volume 2: 1945 to the Present』を読みすすめることにし、モダニズムの本質をまずは理解することとする。

教科書は造形芸術中心に書かれているが、音楽などの他の芸術もこのモダニズムというベースの上で展開しているので、履修を強く勧める。

■成績評価

* 教科書の各章をしっかりと参照しながら、モダニズムの様々な局面や潮流（ウィーン分離派、コラージュとキュビズム、ダダ、ロシア構成主義、表現主義、シュールレアリスム、レディメイドとオブジェ、新即物主義、バウハウス等々）を調べ、できるだけ多くのスライドとともに発表してもらう（グループワーク、50%）。

* 授業を踏まえたうえでの期末レポート（個人、50%）。

■テキスト

Hal Foster, Rosalind Krauss 他『Art Since 1900: Volume 1: 1900 to 1944』『Art Since 1900: Volume 2: 1945 to the Present』Thames & Hudson, 2016（日本語訳があります）。

■受講上の注意

アートが好きで、ネットで学術的な検索ができること、そして英語がとりあえず読めることの他に前提条件はありません。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。

| 授業科目 | クラス | 担当者 |
|-------------------|-----|-------|
| グローバル地域文化教養セミナーⅠ3 | 000 | 阿部 範之 |

■授業概要

「映画」は世界を捉え、それを映し出す装置であると同時に、時には「一つの産業」であるとされ、また「一種の言語でもある」とも言われるように、多面性を備えた概念である。それゆえ、映画を研究する方法も多岐にわたり、画一的な「映画学」など実は存在しない。研究対象に関しても、個々のフィルムや映画人、映像・音声技術の発展のほか、それぞれの国、地域における映画会社及び産業構造、観客や市場のあり方、さらに映画研究自体の変遷などが存在する。当然ながら本授業においてそのすべてを詳細に扱うことはできないが、その端緒として、誕生から現在までの映画の歴史について、主要な映画のモード、およびそれを支えてきた映画産業を軸として理解を深め、検討を行うことが主眼となる。

まず手掛かりとして、『パラサイト 半地下の家族』（ポン・ジュノ監督、2019）について、グローバル、ローカル双方の視点から検討を行う。

その後、世界的に注目される日本の映画監督濱口竜介の著作をひもときながら、映画監督／批評家の目からみた映画のあり方について理解を深め、映画に対する各自の視座のバージョンアップをはかっていく。

こうした作業を行った後、個人発表を通じて、映画に関する地域研究の実践を試みてもらう。

■成績評価

授業でのプレゼンテーション、ディスカッションへの参加、授業態度、および学期末レポートによる総合評価とする。

■テキスト

主に以下の文献を使用するほか、適宜プリントも配布する。

濱口竜介『他なる映画とⅠ』インスクリプト、2024年

イ・ドンジン『ポン・ジュノ映画術—『ほえる犬は噛まない』から『パラサイト半地下の家族』まで』関谷敦子訳、河出書房新社、2021年

村山匡一郎編著『映画史を学ぶ クリティカル・ワーズ』新装増補版、フィルムアート社、2013年

■受講上の注意

積極的な授業参加が求められるクラスなので、毎回しっかりとした準備が必要となる。特にフィルムの鑑賞は必須となるので、特定のジャンルや時代、言語、撮影方式を問わず、様々なフィルムに興味をもち、最低でも週に2～3本は、時間を割いて鑑賞することを苦としない学生を求める。さらに、映画の歴史や基本的な知識について、すでに一定の理解を持つ、あるいは専門書に触れて積極的に学ぶことのできる学生、そして何より、自分の知らないフィルムに対して強い好奇心が持てる学生を歓迎する。サイレントフィルムやモノクロフィルムなど20世紀前半に製作された古典的なフィルムも扱うことになるので、自分が興味のある最近のフィルムしか見ない学生が、なんとなくとっつきやすそう、といった感覚で選択することはお勧めしない。特に、「ポン・ジュノ」や「濱口竜介」が誰かも分からないままに、受講の選択をすることは決してしないこと。

※実際に公開されるシラバスでは内容が一部変更となる場合があります。ご了承ください。